という。この墓がいつの頃からか土中に埋没したが、明治末頃掘り出して坂上の孫兵衛堀の南側に建てられたが、今は円福寺の寺門内に移された。碑面には承応2年〔1654〕の年号が刻まれている。石名はこの地の出身で、江戸吉原の名妓として全盛を極めたという。その死後、明暦年間〔1655－57〕吉原の遊女・楼主・茶屋などが、石名追善のため送ってきたという大般若経600巻が、今も円福寺に保存されている。円福寺には、また、悪玉観音があり、仙台三十三観音の第20番札所となっている。

注(4)　仙台城下4穀町（立町・二日町・新伝馬町・穀町）の一。米穀類の売買特権を与えられていた。この町が取り立てられたのは、城下第1次拡張（寛永5年〔1628〕）以降である。

注(5)　P.96の注(6)及びP.388の「139．早川智寛の生年はいつか」参照。

注(6)　P.29の「15．仙台の七坂八小路」参照。

注(7)　P.29の「15．仙台の七坂八小路」参照。

注(8)　「仙台市全図」（佐藤茂吉編。大正6年刊）が『土樋新丁（元エンマ堂横丁）』と町名を入れている。これにならったらしい「仙台市全図」（陰田勇編。大正15年刊）も、同じ誤まりを記している。

資料　仙台市史（仙台市。明治41年版）
寛文9年仙台城下絵図
元禄4、5年仙台城下絵図
安政3－6年安政補正改革仙府絵図
明治13年宮城県仙台区全図（宮城県）
明治22年仙台市明細図（三輪秀春編）
明治26年仙台市実測全図（仙台市）
明治38年最近実測仙台市街全図（額田金五郎編）
仙台地名考（菊地勝之助）
閻魔堂横丁（横田義雄。「日曜随筆」第61号の内）
仙台郷土研究第9巻第12号（仙台郷土研究会）

69.　「押足軽」とは、またその読みはどうか

問　「押足軽」とは、どのような足軽のことですか。また、その正しい読み方も知りたいのです。

答　「押足軽」とは、戦陣や行列の最後尾に付いて、後方の防備や、不時の事態に即応する役割を荷う足軽[1]のことです。足軽は、本来最前線や前方に位置させるものですが、場合により、必要に応じて、このようにしんがりを勤めさせるとき、このような呼び方をしたのです。

「常憲院殿〔第5代将軍徳川綱吉〕[2]御実紀[3]」巻40の元禄12年〔1699〕閏9月11日の条〔大名旗本従者令〕に

『〔前略〕府内[4]往来のとき。従者小勢にめしぐすべし。たとひ国持[5]たりとも騎馬一二騎。鑓〔やり〕二三柄に過べからず。すべて陪臣は従者軽くめしぐすべし。五千石以上侍七八人。三千石以上六七人。千石以上四五人。三百石以上二三人。二百石一二人。五千石以上は押軽卒二人。三千石以上は〔押軽卒〕一人。三千石以下は〔押軽卒〕無用たるべし。〔下略〕』とある中の押軽卒が、押足軽のことです。この「押」は「おさえ」に当てた漢字で、「おさえ」は我が国では、古くから軍陣用語として、「しんがり」即ち退軍の際、部隊の最後にあって敵の追撃を防ぐこと、またそのための兵の意味に使用されてきたものです。従って「押」は「おさえ」と読むべき当字であります。上掲「大名旗本従者令」を受けた「肯山公活家記録後編」巻之96の元禄12年閏9月14日の条に『オサヘ足軽』と、読み誤まりを防ぐため仮名書きで記してあります。即ち、

『今朝大目付衆仙石伯耆守殿宅へ、坂元勘之允参上ノ処、大名衆供廻ノ儀、御倹約ノ書付二通授ラル、左ニ戴ス、

〔前略〕

一江戸中往還之節、供廻小勢ニ可被列候、縦国持タリトイフトモ、騎馬一騎歟二騎、供鑓二本歟三本ニ過ヘカラス、惣躰之モノ等軽可被列事、

一九千石ヨリ五千石迄　侍七人歟八人

一四千石ヨリ三千石迄　同六人歟七人

一貳千石ヨリ千石迄　同四人歟五人

一九百石ヨリ三百石迄　同貳人歟三人

一貳百石　同壹人歟貳人

一五千石以上ハオサヘ足軽貳人

一三千石ヨリ四千石迄ハオサヘ足軽壹人、

一三千石以下ハオサヘ足軽無用、〔下略〕』。

「おさえ」を「しんがり」の意とする用例は他にもあり、例えば、仙台祭の渡し物[7]〔祭のダシ〕の最優秀を「押祭[7]」〔おさえまつり〕、それに次ぐ優秀を「脇押[7]」〔わきおさえ[6]〕と称して、祭行列の後殿〔しんがり〕に出たものでした。このような用法での「押」は「おさえ」の宛字ですので、「押」の漢字を「おし」と読むようなことは誤まりですから注意しなければなりません。国語の「おし」は、軍陣の用語としても「軍勢を進める」・「進軍」のことで、「おさえ」とは違った意味・用法をもっています。「仙台藩歴史用語辞典」（「仙台郷土研究」復刊第10巻第2号）の中で、「押足軽」を「おしあしがる」と読ませているのは適切でありません。

注(1)　奉行－若年寄－武頭－足軽頭の系統下に属する最下位の歩兵・鉄砲隊であった。天明8年〔1788〕に5,405名、幕末には5,469名あった。足軽は城下をはじめ領内要地に集住し、組

頭表10間裏25間、並足軽表 7 間裏25間の屋敷を与えられ、足軽町や集落を形成していた。古地誌「仙台萩」に『御足軽歌れん坊や片ふさかけて柴田町成田三百五十六十』とある通り、それら6町のほか、堤町・鉄砲町などの城下足軽町は、それぞれ弓・鉄砲の稽古場や鎮守の社を持ち、町全体が団体的な訓練・勤務・生活を行っていた。在々の足軽は農業の傍ら、命ぜられた治安・警備の事に当った。陪臣も、それぞれ家禄に応じた足軽をもった。その総数は、直臣足軽の倍数以上あったという。

注(2) 徳川第5代将軍。家光の第4子。上野国館林城主から宗家に入り、将軍職についた。学問を好み、湯島に聖堂を建立。生類憐みの令を出し、極端に犬を愛護して人民を苦しめ、犬公方〔いぬくぼう〕といわれた。柳沢吉保を重用して失政が多かった。宝永6年〔1709〕死去、常憲院と諡す。

注(3) 「徳川実紀」の一。P. 85の注(3)参照。

注(4) 御府内ともいう。江戸城を中心として、その四方、品川大木戸・四谷大木戸・板橋・千住・本所・深川以内の地。地図では、その境界を朱線で書いたので、これを朱引きといった。

注(5) P. 61の注(8)参照。

注(6) P. 243の「98. 仙岳院について」をも参照。

「宮城の郷土史話」(三原良吉)に、次のように記されている。

『東照宮の祭日は九月十七日と定められ、藩主在国の年を以て大祭とする旨の布令を出し、大祭には城下十八か町の町人町から渡し物(祭のダシ)を出すよう命じ、あくる明暦元年〔1655〕を以て第一回の大祭が行なわれた。家康の命日は四月十七日であったが、農繁期である点を考えて九月十七日としたものである。仙台の子供のマリつき唄に

九月は九月は、稲の刈り上げ刈り納め、仙台お祭りにぎわしや、にぎわしや

とあるように、稲刈りを終って、ゆっくり祭見物ができるようにしたのであった。』

注(7) 「造り物」・「引物」ともいった。

「宮城の郷土史話」(三原良吉)に次の記事がある。

『仙台東照宮の祭礼は江戸以北第一を誇ったものであった。明暦元年(1655)の第一回から第三回までは十八ケ町全部が一年置きに出したが、寛文元年(一六六一)綱村の時から十八ケ町を三組に分け、一組六ケ町が一年置きに出すようになってから各町とも五年に一回出すわけであった。藩ではその年の受け持ち町内の富商の財産、収入等を査定して三月十五日町奉行所に呼び出し、何人かつぎのダシを出せと命令書を与え、七月三十日に内揃(ないぞろえ)と称して祭礼奉行の下検分が行なわれるが、これはコンクールで、それによって等級を定め優勝したダシを押祭(おさえまつり)、次位を脇押(わきおさえ)と称し祭の当日行列の後殿(しんがり)に出る。』

資料 肯山公治家記録後編巻之96(「伊達治家記録」21の内)

古語大辞典(中田祝夫編)